

4. 夏秋期に発生するトマト放射状裂果の加温による軽減（情報）			
[要約] トマトの夏秋期に発生する放射状裂果は、暖房機による 20℃加温で軽減できる。			
研究室名	野菜・花研究室	連絡先	086-955-0277

## [背景・ねらい]

夏秋トマト産地では、晩夏から初秋にかけて果実のがく付近から放射状に果皮が裂ける障害（放射状裂果：図1）が発生し、出荷率が低下している。一方、ミニトマトの促成栽培では高夜温管理で裂果が軽減したという報告がある。そこで、夜温が低下し始める時期から暖房機を運転し、夜温を高めて放射状裂果の軽減を図る。

## [成果の概要・特徴]

1. 平成15年、平成16年及び平成17年の3か年の試験において、最低気温が20℃を下回る9月下旬から収穫終了時まで夜間20℃に加温すると、加温しなかった場合に比べて放射状裂果の発生が軽減された（図2）。
2. 夜間20℃に加温すると、一果重はやや小さくなるが、商品果数はやや多くなり、商品果率が高くなった（表1）。

## [成果の活用面・留意点]

1. コスト削減のための加温方法を今後検討する必要がある。
2. トマト夏秋栽培において発生する裂果の軽減に応用できる。

[具体的データ]

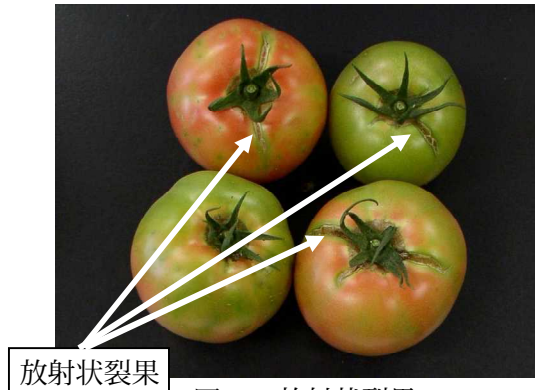


図1 放射状裂果

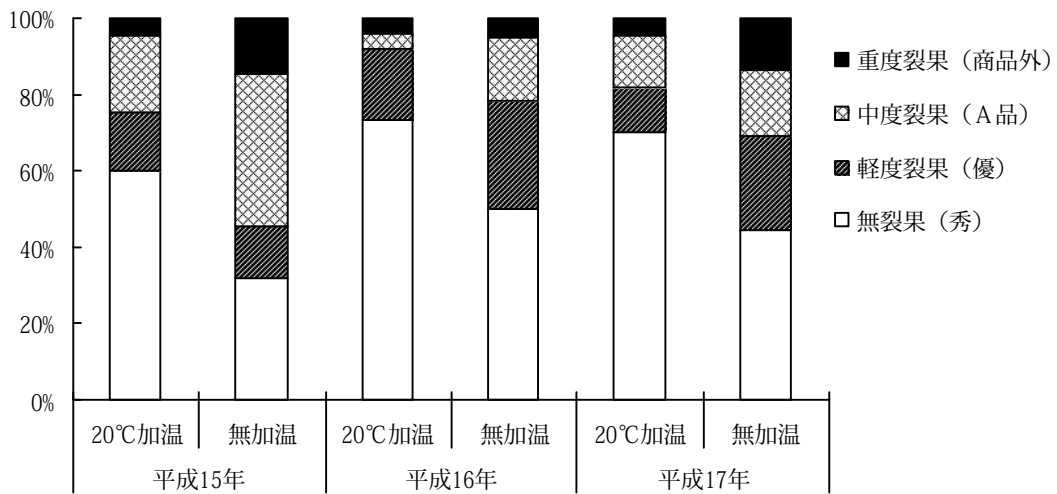


図2 加温処理がトマトの規格別比率（放射状裂果）に及ぼす影響<sup>z</sup>

<sup>z</sup> 9月下旬から12月中旬まで調査

表1 加温処理がトマト一果重、収量並びに商品果率に及ぼす影響<sup>z</sup>

年	処理	定植	収穫	一果重 (g)	総収量		商品果収量 <sup>y</sup>		商品果率 <sup>x</sup> (%)
					(kg/株)	(個/株)	(kg/株)	(個/株)	
平成15年	20°C加温 <sup>w</sup>	7月28日	9月16日～	187	3.7	22	2.8	15	68
	無加温 <sup>w</sup>		12月19日	233	4.2	20	2.9	12	62
平成16年	20°C加温 <sup>v</sup>	6月10日	8月9日～	179	3.7	21	-	19	87
	無加温 <sup>v</sup>		12月16日	188	3.8	20	-	17	86
平成17年	20°C加温 <sup>v</sup>	7月29日	9月18日～	155	3.6	25	2.7	18	71
	無加温 <sup>v</sup>		12月15日	170	2.2	14	1.5	9	64

<sup>z</sup> 9月下旬から12月中旬まで調査

<sup>w</sup> ハウスサイドは手で17:30から8:30まで閉じた  
(ただし、無加温は10月下旬までは開放)

<sup>y</sup> 秀品、優品、A品の収量

<sup>v</sup> ハウスサイドは自動で22°Cを下回る場合のみ閉じた  
(ただし、無加温は10月下旬までは開放)

<sup>x</sup> 秀品、優品、A品の果数÷総果数

[その他]

試験研究課題名・事業名：夜温管理による夏秋トマトの裂果軽減と出荷時期の延長  
 予算区分：県単  
 研究期間：平成15～18年度